第4回 今後の県立高校の在り方検討委員会 議事録

日 時 平成28年 8月18日 (木)

13:30~16:00

場 所 サンラポーむらくも 彩雲の間

1 会長あいさつ

皆さん、こんにちは。猛暑と言いますけれども、もう夜になるとかなり虫の音が日々大きくなってきて、そろそろ夏も終わりかなと。子供のころの、こんなに長い休みがあったのに何にもできていないというあのトラウマがよみがえる季節でございます。

今日、限られた時間ですけれども、私どもの委員会も4回目になりますので、実質的なところに入っていきたいと思っております。短時間ですけれども、議論が進むようにご協力をお願いいたします。

2 議事

【議題1 次期再編成基本計画に向けての検討課題の論点整理】

[資料1を肥後会長より説明]

<意見交換>

○委員

大きいくりで2つ。まず、一つは、これは報告になるが、先月、島根県の高P連の会議があった。皆様、この検討委員会に対して、大変関心を持っているが、各高校のPTA会長のほぼ全員が3点のことを挙げていた。一つは、各高校の特色の明確化とPR力の重要性。2番目に、受け入れ環境、寮とか下宿などの整備。3番目は、地域ということ。

1番目の各高校の特色の明確化とPR力だが、1校だけ生徒が来なくて困ったことはない、毎回オーバーで、かえって大変なのだという高校が確かにあった。何故だろうと思ひ具体的に聞くと、やはり魅力化、スポーツであるとか、とても魅力的な部分、強みを持っていた。強みを持っている、特性を持っている高校はこんなに強いのかということを実感した。

ただ、課題はやはり寮が少ないこと。大半のPTA会長が、子供たちが少なくなり、県外に募集をかけていかななくてはいけない、そういったことを話していた。しかし、全員が課題の一つに挙げたのが寮だった。2番目の寮の整備、建物自体のことも整えていかなければいけないが、舎監、管理する人の問題もある。舎監を教員としてしまうと、教員の負担が増えてしまうので、こ

の舎監についても地域の皆様の協力を得なければ前に進まないのではないかという意見があった。

また、寮の設置に併せた送迎バス等の配置については、一見いいように思うが、これをしてしまうと、地域の人たちとのかかわりが減ってしまう。実際に送迎バスを運行する学校には、地域から声が上がっていて、最近高校生たちの姿を見ない、県外から生徒募集をかけるのはいいけれども、地元との関わりがない気がして私たちは寂しいという声が多く聞かれるという意見があった。

3番目は、地域。先ほどの舎監の話と高校生の姿が見えなくなったという意見等もある。これは今後の対策だが、レンタサイクルを使って休日は町に行っておいでと子供たちに話しているという高校の事例もあったので改善点はあると思う。

先ほどの論点整理について、2点ほど。ICTについて、学校の先生と話をしていて、例えばこんなことはできないか、委員会の場で伝えてくれないかと言われたことがある。その先生が言うには、ICTの3点セット（プロジェクター、実物投影機、ホワイトスクリーン）の導入に、少し予算をかけて欲しいということだった。例えば島根県下全ての高校にICT3点セットが導入された、島根県はICTに特化していると言えるようになれば、県外募集をかけるとき、島根県の大きな特徴になるのではないかという意見をいただいた。ICT3点セットを導入している学校の現状と成果について聞けると、今後の組み立てができると感じた。

次、基本的な教育環境について、3点意見がある。一つは、昨日の山陰中央新報にも載っていたが、自学の場所が不足しているということ。子供たちが勉強したいと思ったときに勉強する環境が整っていなければ、学ぶ意欲が低下してしまう。実際我が子や周りの子供を見ていて、テスト前に勉強がしたいから図書館に行く、でも図書館がいっぱいで勉強する所が全然ないということを書いてきた。だから、勉強のできる場所の確保であるとかそういうことを企画している、活動している方への支援を考えていただきたい。

2点目は、高校生は年齢が近い人の意見をよく聞く。大人が幾ら言ってもなかなか聞いてくれないことがたくさんあるが、高校の先輩、高校を卒業した大学生の話はよく聞く。年齢の近い方たち、大学生との交流についても、もう少し皆さんと話がしたい。

3点目、これは前回も話をしたし、前回の会議が終わってから他の委員とも話をしたが、やはり奨学金について具体的にこの場で話ができればありがたい。基本、貸与制の奨学金でいいと思うが、島根県にUターンする、島根県に本社を持つ企業に入社をする等の条件を満たせば、返済の必要がないといった島根県独自の奨学金制度の導入についても、検討課題の中で具体的に話ができればありがたい。

○肥後会長

ICTの問題は大切で、特にそれを活用しながら生徒の主体的な学習につなげていくことが重

要。その意味でラーニング・コモンズと呼ばれる自学自習スペース（施設・設備）を充実させていく流れが、特に大学教育の中で起きている。高校でも、現在できる工夫もあるのではないかと。奨学金の問題も、県外からの高校生を県内に呼び寄せる方策ということであれば、そういう奨学金制度があってもいいかもしれない。

現在、寮の舎監はほとんど学校の先生がやっているのか。

○事務局

従来は教員だけでやっていたが、数年前から嘱託舎監を8校で導入している。

○委員

先ほどの話に関連するが、最も基本となる生活環境というか、教育環境の中に含まれると思うが、下宿とかそういった環境のことを把握しておく必要があると思う。それと、行きたい学校があっても遠くてなかなか行けないというような方々もいるのではないかとと思うが、中山間地は、通学エリアが比較的広いのではないかと気がする。そういう生徒をどういう形で受け入れているのかという現状を把握しておく必要があると思う。例えばこの商業高校に行きたいとかこの工業高校に行きたいが、自分の家の近くにはない、だけども行きたいといった人たちがどういった形で進学を実現しているのか。あるいは、進学を実現できないで甘んじているのか。

○肥後会長

その辺はかなり大きな仕組みの問題でもある。現在は、中学を出たら家から通える範囲の高校に進学するというのが普通感覚。高校教育の内容など自分に合った高校、行きたい高校を、遠くても選んで行くという前提ではないように思う。逆に言えば「どこの高校に行っても中身は大差ない（教育の質の保証）」ということが前提になっており、それが同時に各高校の魅力化や個性化の努力を妨げているといってもよい。そのあたりの前提の問題も含めて、今後は議論の必要があるかもしれない。

○委員

特に石見エリアは、松江と異なり、そういった問題が大きいのではないかと想像している。

○委員

学校の特色化とか地域との関係を考える上で、コーディネーターの存在というのが大きいと言われている。コーディネーターを含めた人材育成をどのように考え、体制を整えるかということは、これからの島根の魅力化を考えていく上で大事な視点ではないかと思う。

○肥後会長

現在もコーディネーター制度はあるが、コーディネーター制度を充実させていくことが、一つは魅力化や特色化に大きな意味を持つのではないかという意見だったと思う。

もう一方の議論としては、高校の魅力化とか特色化というのは具体的に何をすることなのか、

打てる手の範囲というのがどの辺なのか、あるいは工夫の範囲というのはどの辺なのかという問題もあろうかと思う。例えば普通科と商業科を一緒に設置することは可能なのかと考えたときに、教育課程がどうかという問題に当然なっていくわけで、その魅力化の範囲は、教育課程は崩せないという範囲なのか、それとも自由度がどの辺まであるのかということ、その辺は少し確認をしなければいけない。

○委員

論点の1番の①に「意欲と能力のある生徒に対してどういう教育環境を提供するか」ということが書いてある。一方で、3番の①に「学ぶ力や共通の資質、能力をさらに高いレベルで身につけるにはどのような教育環境」というテーマが書いてある。どちらも教育環境に関わることなので、1番の①は3番の①に含めて書いたほうが、まとめるときに楽ではないかと思う。

○肥後会長

1番の①と3番の①は当然重なるところがある。ただし、1番の①は、どちらかと言えば、教育的に高度な内容をどう保障するかということであり、3番の①は、コアをどう保障するかという議論である。少し性質が違う面もあろうかと思うので、この形で残したい。

○委員

3番の③、前回と比べて「通常の学級での」という文言が落ちている。発達障がいであるとか、特別な教育的支援が必要な生徒が増加していることは、小学校、中学校でそれぞれ何%いるかという数値も確認し、共通の認識としてきたところだが、「そうした生徒」という言葉が要るのだろうかということが気になった。「そうした生徒とともに学ぶことを教育上の良さや強みにしていく」、これは何となくそれが良くないものであって、良いものにするためにとか、何か違った者がいるというような感覚で受けとめてしまった。事実として特別な支援が必要な生徒が増加しているので、そうした生徒の力を伸ばすためにどのような教育環境を整えればよいただろうかというような、すんなりした視点のほうが実態としては合うし、いろいろな誤解が生まれないのではないかと思った。

○肥後会長

誤解を生む可能性はあると思う。そういう書き方になっている背景には、インクルーシブ教育をどう考えるかという問いがある。インクルーシブ教育は、特別なニーズのある生徒にどのような教育をするかではなく、そういう生徒も通常の学級の中にいることが当たり前になること、いわゆる「合理的配慮」が前提として行われるような「通常の教育」が当たり前になることが今後の教育の一つの大切なテーマであろうという意識からそのような表現になっている。

○委員

これは県立高校であって、県立特別支援学校を想定はしていないが、体が不自由な子供と一緒に

にすることで生まれるものはとてもたくさんある、もしかすると誤解かもしれないが、良さ、強みにしていくというよりも、これはもう当然のことであって、言われたインクルーシブという視点に立った書きぶりとするのか、ある程度、下の④の項目にあわせて、そうした子供への教育にかかわってやるべきことを客観的に書いてしまう方がよいのかで迷っている。

○肥後会長

大事な指摘だと思う。事務局で、「通常の学級での」を落とした理由は何か。

○事務局

通常という言葉落了した理由は、通常学級というのは小・中学校の概念であり、県立高校なので、通常という言葉を削除した。

○肥後会長

ここの文言の整理はちょっと時間がかかりそうなので、少し時間をかけたい。3番の③④を一緒にするというのは？

○委員

3番の④と一緒にというのは書きぶりを一緒にするということで、こういう生徒が増加しているので、こういった力を伸ばすためにどのような教育環境を整えればよいか、要するに「強みにしていくために」と、そこのところを取ってしまってもどうか。

○肥後会長

ではご指摘のとおり「そうした生徒と共に学ぶことを教育上の良さや強みにしていくために」を削除することとする。

○委員

そういった個々の力を高めるためにとか、目的は、良さや強みに学校として変えるのではなく、その力を最大限に引き出すことだと思うので、目的を書くのであれば、そういったことかと思う。

中学校の現状としてお願いしたいことがある。中学校には、特別支援学級に在籍する子供たち、障がいによって学級が分かれているが、中には障がい重複してなくて、単一の障がいとして在籍している生徒がいる。今の県立の高校でそうした生徒が入れる学校があるのか、学級があるのかといったときに、これは大きな課題であると思っているので、このことも視野に入れていただけたらと思っている。

○肥後会長

そのことは、昨年、前川事務次官（当時文部科学審議官）が大学に来られた折のお話の中で、「中学校の特別支援学級に在籍している人の進学率がほかに比べて少し低いということについて、文科省も把握しており、一つの課題と捉えている」という発言があった。

○委員

この会の守備範囲の問題になろうかと思うが、在り方としてどこまで考えるか。例えば学校規模、クラスを含めてだが、そういう部分、先ほどあった備品とか寮の設置、それから、学科の再編、カリキュラムの在り方、地域との連携プログラムも含めた教育プログラム全体、そういったことに加えて、システムの話もあると思う。適切にシステムを回す人を各学校に配置する、あるいは育成するということがないと、教育として成り立たないと思う。人の部分をこの在り方の中に含めて考えるのか考えないのか。例えば人事異動ルールも然りだが、そのあたりをどう扱うかということについて共通理解を得たい。

○肥後会長

高校がそれぞれの特色を出し魅力を維持していくために、人事異動が必要な面と、それによって維持しにくい面とあろうかと思う。高校の魅力化とか特色化に係ってそういった意見がこの委員会から出ることについては、一定程度合理的な範囲ではないかと私は考えている。それを県が受けてどういうルールにされるかはまた別の問題だが、この委員会からそういう意見が出ることは別に問題ではないと思うので、3番の括弧の中、「学習内容・方法等」の間にもう一つ点を打って、「人材育成及び確保」を入れることとする。

○委員

2番の「地域資源を生かし地域活性化にもつながる島根ならではの高校の魅力化、特色化をどう進めるか」という内容に関して、まず、①で「各地域の高校教育を」と書いてあるが、この各地域というのはどのぐらいのフレームというか、大きさで見るか。次の議題にもあるが、江津と浜田の問題、これは江津と浜田という地域、またそれに関連して石見地域というのが出てきている。島根県の場合は、出雲地域、石見地域あるいは隠岐地域みたいな形に分かれるが、その地域をどこまで細かく見るか。それと、第1回の会議資料でいろいろなデータを確認したが、いわゆる都市部、市部と中山間地域の話も出ていた。その辺どういう切り口でこの地域を見ていくかということも、整理したほうが良いと考えている。

○肥後会長

ここでの地域は、高校が存在し、その高校に現在通っている生徒が住んでいる地域という程度のイメージで書いているので、それ以上のことは考えていない。しかし、この後話題になる江津や浜田は、実際に江津、浜田に高校がある、その全体の中でどういう高校をどういうバランスで置いていくかという話になるから、そこは同じ地域という言葉を使っても広めになっている。個々の問題を考えていくときに、この地域が何を意味するかは逆に定義をしなければいけないので、そのところは少し心に留めて議論をしていきたいと思う。

【議題2 江津市エリア及び浜田市エリアにおける県立高校の可能性の検討について

石見地域全体を視野に置いた高校教育の方向性について～工業教育を中心に～ 前回検討委員会の質問に対する回答】

[資料3を事務局より説明]

<意見交換>

○委員

普通科高校と専門高校の教育課程の違いを示した資料について、卒業単位74単位は文科省が示している単位数であって、松江北高校の場合は99単位の授業をしているので、そういう意味では、今の学校の授業が極端に減っているということではないので、誤解のないようにお願いしたい。

○委員

どのような理由や過程で、新しい学科をつくったり学科を変えたりすることが決まっていくのか。

○事務局

これまで、ここ10年、15年、生徒数の減に伴って、工業系も、ほかの専門高校もそうだが、学級減とそれに伴う学科改編を行っている。これは数年かけて、もしかしたらこの辺で減るかもしれない、学科改編が必要になるかもしれないということを学校と直接、何度もやりとりをしながら決めていく。その際、学校は求人状況、地域の要望、産業界の求人数にあらわれない要望などを教育委員会事務局に伝え、一緒に検討しながら進めていくので、基本的にニーズを反映していると教育委員会としては考えている。

○委員

インテリア系とデザイン系を設けたときに、教員の採用や異動の問題とか、新しく学科をつくる際のネック、難しさはあるのか。

○事務局

教員の採用というよりは、むしろ生徒の就職・進路先が問題である。例えば江津工業の中でインテリア系の希望が多かった時期があった。ところが、生徒は入ってくるが、受け皿が非常に限られていて、ある程度、募集単位を縮小せざるを得ないということがあった。その専門家が非常に少なくても、ニーズがあれば、小さいニーズでも救わなければいけない。人事上は、正規でなくとも例えば非常勤という形でお願いすることもできるので、教員の異動を理由に学科をどうこうするという事は基本的にはない。

○委員

地域のニーズを酌み取るのが大事で、それに応じて卒業生の受け皿があれば学科改編とか、

新しい学科をつくることは可能という理解でよろしいか。

○事務局

あと、財政的な問題もあるが、基本的にはそういう考え方である。

○委員

情報技術系が松江に1校設置してあるだけだが、子供たちの進路希望などを聞いてみても、今の情勢を考えても、何となくここがもっと膨らんでいるのかと思っていた。石見部には設置されていないが、ほかの分野に比べてそこは石見部の弱いところなのか、その辺の現状が知りたい。

○事務局

情報というのは、商業系の情報処理と工業系の情報工学がある。ニーズが高いのは情報処理のほうで、この後、商業関係のところで紹介する予定である。

【議題2 江津市エリア及び浜田市エリアにおける県立高校の可能性の検討について

石見地域全体を視野に置いた高校教育の方向性について～商業教育を中心に～】

[資料4を事務局より説明]

<意見交換>

○委員

商業科在籍者数の推移のところ、出雲地域に比べると石見地域は商業科に進む子供たちが半減しているが、単に子供たちの数が減っているのか、その割合に対して同じくらいに減っているのか、それとも商業科だけ減り方が大きいのか、何か要因があるのか。

○事務局

単純に石見地域の子供たちが減っているということはもちろんある。

○肥後会長

その辺はデータがあるので、見ていただければいいと思う。要するに、子供たちの人数の減り方に対して、商業高校への入学者の減り方が、普通高校への入学者、あるいは工業への入学者の減り方と比べて比率に違いがあるかといったような、つまり希望者が減っているかという意味だが、その辺は19ページに中学生の進路希望の状況が示されているので、データを見ていただければすぐわかると思う。

○委員

商業科から商業関係への進学が少ない、中学生の進路希望でも商業が少ないが、中学生が減っているからなのか、希望者が減っているからなのか、こういう状況が、長いスパンで見たときの時代の変化に応じて、商業科の置かれている環境が変わっているということなのか、それとも以

前から商業科というのはこういう先に進む人も少ないし、希望も少なかったのか、全体の感じを教えてください。

○事務局

全国的な傾向で見ると、島根県は専門学科の割合が高いほうである。全国的には普通科が増えている状況である。

○肥後会長

専門高校への進学率自体は少し下がっていて、普通科志向が高くなっている。島根県の学科再編もそういう形で進んできていると思う。

○委員

例えば、江津の中学生を江津に送り出すという機能を基本的に考えているのか、それとも島根県全体での捉え方なのか、県立高校の果たす役割をどう考えているのか。地域のニーズ、地域の受け皿というときの地域を県立高校においてどのように規定しているのか教えてください。

○事務局

これまでの考え方では、普通科の数校を除き通学区は設けていないが、基本的には自宅から通えるところに高校を配置してきた。もちろん島根県は地理的な環境があって、昔から自宅から通えないところにお住まいの方もいるが、比較的帰省が容易であるという意味での地域という考え方にも基づいて高校を設置してきた。今後どうするか、全県のスパンで考えましようとなるのかどうかは、検討委員会で意見を出していただければと考えている。

○委員

商業科の進路・就職状況が示されているが、商業科の卒業生が高校で学んだことを生かすような形で進学、就職をしているとみなされるか。

○事務局

10年近く前の話になるが、例えば、出雲部にある商業高校で最大の求人元は、世界的なシェアを誇る某製造業からの求人だった。待遇面も悪くないということで、当初、生徒本人としては、商業系の学習を生かしたところを希望していたが、家族と相談の上、総合的に判断し、そちらを選んだというようなことがあった。その企業は今でもかなりの採用を継続していると聞いている。そういう企業があると、こういう割合が非常に高くなる。それは恐らく私立でも同じではないかと思う。

工業科に比べると専門性を生かした就職が若干少ないということは言えるかと思うが、これを参考に、今後の石見地域の商業教育等を考えていただければと思う。

○委員

商業科の現状は、基本的に島根特有の課題というよりは、全国的な傾向と捉えてよろしいか。

○事務局

商業教育の専門性とは何か、文科省の調査官は、「商業高校は基本的には生産者と消費者をつなぐ人材の育成だ」と言っている。専門的な資格ということになると非常に難しいところがあり、企業側から強く求められている資格としては、日本商工会議所の簿記の資格、経産省の情報関係の資格、そういったものが強く求められている。そういった資格を高校在学中に取得した生徒は、間違いなくそれを生かした進学あるいは就職を実現している。ただし、それ以外の生徒の進学とか就職については、工業高校と商業高校というのは基本的な理念や教育目標に違いがあるので、専門性と進学、就職を結びつけて考えられると難しいところが出てくるのではないかと思う。

【議題2 江津市エリア及び浜田市エリアにおける県立高校の可能性の検討について

石見地域全体を視野に置いた高校教育の方向性について～普通科教育の「核」の形成について～

[資料5を事務局より説明]

<意見交換>

○委員

商業とか工業にはない、この「核」というのはどういう意図を持ってタイトルにつけたのか。

○事務局

この表現については、これまでも説明しているところで、今回初めて出したものではない。特定の学校云々という問題ではなくて、石見地域全体の普通科教育を活性化するためにどのような進め方がいいのか。そうなったときにどうしても中心となるものが必要だろう。それが学校なのか、あるいは学科なのか、そういったことについては委員の皆様からいろいろな意見をいただきたいと考えている。

○委員

平成25年に、江津高校の英語科を普通科に改編された経緯があった。今日の資料でスーパーグローバルハイスクールの話が出て、グローバル化は今、とても必要とされている反面、そういった経緯があったようなので、そのあたりの経緯をお聞かせいただきたい。

○委員

当時、江津高校で校長をしていたが、一番大きな要因は、やはり英語科の定員充足率が非常に下がってきたこと。40名定員のところ、20人を切るような状況が数年続いた点にあると思う。

○委員

ある程度予測はついていたが、難関大学合格者数、医学科現役合格者数、この差にまず衝撃を

受けた。隠岐の島の隠岐高校はもっとだと思う。親としても、それから初等教育にかかわってきた者としても、やはりこれだけの差が出るというのは衝撃的で、私は島に戻ってくる子供を育てたいと思っているが、子供たちが自分で通える地域にある高校で自分の夢を目指せるということはとても大事なことだと思っている。隠岐高校でも大学進学を十分に目指していけるような地域の力、家庭環境とか、そこら辺もしっかり積んでいかないといけないということを高校教育に期待するところも含めて感じた。自分の島で高校まで子供たちがしっかり学べる、自分の夢を追える環境をつくってあげられたらいいなと、理想だが、感じた。

○肥後会長

普通高校の教育水準は、当然、入学してくる生徒の実態（入学時の学力や進路希望など）に合わせて決まっていくことになるので、同じ学習指導要領に基づいて教育課程を組んでも、実際にどこまでの学力を求めるか、鍛えていくのかは、高校によって（あるいは同じ高校でもクラスによって）結果的に異なってくる。ただそのことが「地域間の高校の差」として固定化してくると、ご指摘のような問題が起こり、自分の生まれた場所には自分の夢を追える高校がないということになってしまうかもしれない。またその前提として、小学校—中学校と同じ教育課程を学んでいるはずなのに、高校入学時点で、どうしてこれだけの差が出てしまうのだろうかという素朴な疑問もある。県では、中学校段階、高校段階の学力の差について、地域差という点からどのくらい課題として捉えているか。力の差が生まれる要因について分析や考えがあれば教えていただきたい。

○事務局

はっきりとした分析に基づいた発言ではないが、一つは、高校入学のときの、それぞれの学校に入る生徒の力の差というものが一つあると思う。それから東部、西部の学級数も書いてあるが、松江の学校7クラス、出雲8クラス、やはり学級数が多いところにはある程度同じレベルの生徒が集まり、いわゆる切磋琢磨といった生徒が学ぶ環境の差というのも少なからず影響しているのではないかと感じている。

○肥後会長

競争的環境をつくるのが、教育上一定の意味を持ち、ある種の良さにつながっていく面もあると考えたときに、私どもの地域は、そういった環境を利用した切磋琢磨が今後しやすくなる地域とは言いにくいということが全県的に言える。だから、そのときにどうするのかということを一方で考えないといけないかもしれない。少人数ということを利用していい教育ができる可能性もあるし、一方、こういった競争試験を一つの物差しとしてみると、どうしても競争力が弱いと勝ち残っていけない。集団に影響される（スケールメリット、デメリット）ということはあるかもしれない。そのあたりも今後考えていかないといけない問題である。

○委員

普通科への志望が増えている中で、商業とか工業というのは比較的将来の方向性がある程度見据えてその学校に行くということも考えられるが、今、不透明な社会の中で、高校生の時代に自分の進路を決めるのではなくて、普通科高校で一般教養をしっかり勉強して、大学、専門学校に行って自分の方向性、将来の方向性を見出すという考え方もあるのではないかと思うが、そのあたりについてはいかがか。

○肥後会長

自分の行き先（可能性）についてあまり早期から絞ってしまうことを好まず、できれば先延ばしにするという傾向が一般にあるのではないかという指摘だと思う。大学の教育学部（教員養成学部）に対する志向が低落傾向にあるのは、そうした影響もあると考えている。高校生の時点で、小学校の先生になりたい、中学校の先生になりたいということを選んでしまうと、「先生になること」以外の進路の選択肢を捨てることにもなる。それが、例えば経済学部に行っても社会科の教員免許は取れると言うと、そっちのほうがいい（いろいろな選択肢が残る）という感じがして、全国的に教員養成学部は（一定のニーズはあるものの）大勢としては選ばれない傾向にあると感じている。

○委員

難関大や医学科に行けばいいという意味ではないが、人間生まれた地域は選べなくて、たまたま生まれた地域によって大きな格差が出るというのは望ましくないし、埋めてくというか、いろいろな形で環境を整えていく必要があると感じている。県東部の学校にもともと学力の高い子が行くという傾向がもちろんあるとは思いますが、地域差というのは埋まったほうがいいと私は感じていて、これに関して県は課題意識を持っているか。また平成17年度と比べたら半減、この半減というのは進学者数のことなのか率のことなのか、それを踏まえて、必ずしも国公立に行けばいいと言う意味ではないが、これだけ減っていることについて、何かの影響があって、そこは改善すべき課題だと感じているのか、それとも希望者が少なかったのか、その他の要因が考えられるのか。県内全体がそういう傾向で浜田とか江津でも同様だという話なのか、ここ特有の課題なので、何か対策を打ったほうがいいと課題として捉えているのかお聞きしたい。

○肥後会長

学力の東部—西部の差というのはときどき耳にすることがある。県には子どもの学力向上を専門に検討しているチームもあり、その中でいろいろな分析がされていることと思う。もし学力差に関する地域差の問題があると認識していて、その差を県の教育課題だと捉えておられるのであれば、そうした資料もお示しいただきたい。先ほどの難関大学への進学率というのは学力差の一つのインデックス（指標）でしかないのもっと他の適切な、あるいは多様なインデックスと

いうものがあるかもしれない。その辺は少し慎重な分析も必要なところなので、ご検討いただきたい。

○委員

県外の高校へ進学する者は石見が33名、出雲が65名ということだが、卒業生数の割合からすれば、石見は多いと思う。どういう目的で、例えば県外の実業高校へ出るのか、あるいは進学のために出るのか、教えていただきたい。

○事務局

県外高校へ進学した理由について、調査をしたことはないが、進学に関する事、部活に関する事、この2点だと思う。

人数についてだが、これは9月段階での進路希望であり、実際に出た数ではない。割合は、出雲地域65名は全体の1.4%、石見地域の33名は全体の2%に当たる。

先ほど国公立大学の合格者数の半減になったのは率なのか数なのかという質問があったが、これは数である。

○委員

理数科を併設する普通科高校の入試倍率だが、これは理数科と普通科を合わせた、その学校全体の入試倍率ということか。

○事務局

そのとおりである。

○委員

その前提も含めてだが、それぞれ石見地区と出雲地区の倍率が出ているが、教育委員会として、1倍を割るとするのは少なくとも普通科あるいは理数科では望ましくないと思うのか。少なくとも理数科が併設される学校としては低いのではないかと思うが、適当な倍率と考えているのか見解を聞きたい。

○事務局

県全体では、今年度入試については志願倍率が0.95倍であった。1倍を切った県は全国で6県のみである。全体はそうだが、ご存じのように、離島・中山間地の学校もあり、定員の倍率は何倍が適正かということは県としては示していない。

○委員

理数科を併設しているというのは、いわゆる進学校と呼ばれている学校ではないかと思うが、その倍率が、ここ5年間右肩上がりになっているが、1.14倍というのは高いと考えられ、盛り返してきたと考えているのか、まだまだと考えているのか。

○事務局

まさに本日整理した検討課題、県全体を考える検討課題に適合するのではないかと思う。そういったことを踏まえながら、江津、浜田をモデルとして、県全体を考えていただければと思っており、それも含めていろいろ議論いただければ、教育委員会も参考とし、検討していきたいと考えている。

○肥後会長

県がこれをどう感じるかということよりも、我々の委員会で、そういう特色をもたせた学級を置く以上はその目的に適うような一定の競争率を確保すべきだと、競争率を高くするために定員を切り下げるべきだとかいったような議論はここで出るべき議論であり、ぜひそういった観点から今後議論していきたいと思う。

3 閉会挨拶（片寄教育監）

長時間にわたりまして、肥後会長様を始め委員の皆様方、熱心なご議論ありがとうございました。最後のところで資料2を使いましてご案内させていただきましたように、来月、浜田、江津のほうへ出かけて、それぞれ浜田市、江津市のほうでお選びいただいた方の意見陳述を受けるとい運びになっております。前回と、それから今回のところで、工業教育、商業教育、普通科教育についての基礎資料のご理解をしていただきましたけど、いよいよ来月の公聴会で地元の皆様方からのご意見を頂戴し、それを受けてさらには深みに入るような感じがしております。本日のところも、委員の皆様方におかれましては、私どもの想定を超えるような質問を多数いただきまして、勉強の機会になったと思っております。そのようなさまざまな立場からご意見、ご要望を出していただく、それがこの会の望ましい姿であろうかなとも思っているところでございます。

皆様方には、大変お忙しい中、また引き続きお世話になりますけれども、よろしく願いいたします。本日はどうもありがとうございました。

4 閉会